夏目漱石の参禅

須山長治

少年の頃、『坊っちゃん』を読み終わり、東京人の漱石が急に四国松山に行ってしまったのはなぜだろうと疑問に思ったことがあった。もちろん読後に作品の解説を読んでのことではあったが。後年『漱石全集』を読むようになり、各巻に付す月報を愛読していると、国文学者の大野晋の『漱石とお弟子』という文章の中に、高等学校時代ドイツ語担当の菅虎雄先生の授業中のことが書かれていた。自由質問を許された時のことであろう、大野少年は、「漱石が伝通院から急に松山に行ってしまったのはどんな事情があったんですか」と質問した。すると、スガトラと生徒から愛称された老先生は、「一瞬置いて、ふいと横を向いて『そんなことがあったかねぇ』といわれたきりだった」。その時大野少年は老先生の横顔に何を感じただろうか。

漱石の松山行きは明治二十八年四月で、満二十八歳の時である。大野晋の質問の中の「伝通院」とは、その前年の明治二十七年に漱石が短期間下宿していた処で、正しくは小石川（現在の東京都文京区小石川三丁目）の無量山伝通院であるが、実際に彼が下宿していたのは伝通院ではなくそれに隣接する宝蔵院だと言われている。隣室に尼僧が数人いて漱石は不愉快な思いをしたと言っているが、そもそもここに下宿したわけは、若夫婦の新居に転げ込んできたおかしな後輩の姿を見るに見かねて、家主である菅虎雄が数日間自宅に寄寓させたことに因る。ところがある日突然、漢詩を書き置きしてわけのわからぬ状態で出て行ってしまった。その後、また菅は世話を焼いて紹介して住まわせたのが、大野少年が言っていた「伝通院」のことである。

この明治二十七年という年は、夏目漱石にとって本当に辛い年であった。二月には、血痰が出るため先輩の菅虎雄に連れられて北里柴三郎の病院に行き、結核かどうか検査を受けた。結果事なきを得たが、三月九日付けの友人菊池謙二郎宛の手紙には、

「前略　実は去る二月初め風邪にかゝり候処、其後の経過よろしからず、いたく咽喉を痛め、夫より細き絹糸の如き血少々痰に混じて咯出仕り候故、従来の遺伝と伝染と両方へ転んでも外れそうのなき小生故、直ちに医師の診察を受け候処、只今の処にては心配する程の事はなく、矢張り平生の如く勉学致してもよろしく・・・・・」と、現状を詳しく綴っているが、その後に、「何となう死に来た世の惜しまるゝ」という句をはさみ、

小生始め医師より肺病と聞きたる時は、兼て覚悟は致居候へば、今更の様に驚愕は不仕、又死と云ふ事に就ても、小生は至極冷淡の観念を有し候へば、咯血抔に心経を痛むる事は無之りしも、只家の後事抔を考へ過ぎて少は心配仕候、然し一方にては一度び此病にかゝる以上は功名心も情慾も皆消え失せて、恬淡寡慾の君子とならんかと少しは希望を抱き居候にも係らず、身体は其後愈壮健に相成医師も左程差当りての心配はなし抔申き聞け候に就ても、性来の俗気は依然不改、旧観実に自らもあきれ果候。そこで君の漫興に次韻して蕪句一首、

閑却花紅柳緑春　　閑却す花紅柳緑の春
江楼何暇醉芳醇　　江楼　何ぞ芳醇に酔うに暇あらん
猶憐病子多情意　　猶お憐む　病子の多情の意
独倚禅牀夢美人　　独り禅牀に倚りて美人を夢む

御一笑可被下候・・・・」と。

手紙はまだ続くが、結核の恐れから、死を見つめる寂しいまなざしの一句と友人の書簡中の贈答詩に和して次韻したと言って、青春を謳歌できず自身の病躯の中でひっそりと恋人を思い描く暗い姿を七言絶句にまとめている。

またこの年の夏から秋にかけて自宅から帝国大学の寄宿舎に移り、寮友たちと過ごすが、特に同室になったり向かいの部屋になったりした二年後輩の小屋保治とはよく語りよく散歩した仲であって、（決して彼は大塚楠緒子をめぐる恋敵ではないが）後年小屋はその寮生活を振り返って『学生時代の夏目君』という文章を書いている。

「どんな場合であったか忘れたが、

朱　褒

魂歸溟漠魄歸泉　　魂は溟漠に歸し魄は泉に歸す
只住人間十五年　　只だ人間に住すること十五年
昨日施僧裙帶上　　昨日　僧に施す裙帶の上
斷腸猶繫琵琶絃　　斷腸す　猶お琵琶の絃を繫くるを

と云ふ三體詩にある哭亡妓（亡妓を悼む　朱褒の作）といふ詩を微吟愛唱してゐたのを今でも覚えてゐるが、・・・・・」

漱石全集月報第四号昭和三年六月「學生時代の夏目君」

この件には悲しい詩を好んで口ずさむ夏目金之助の哀れな姿が浮かび上がる。小屋も同情はするが簡単には触れられない友の辛い姿を見ているばかりであったようだ。身体の不調もさることながら、先の自作の漢詩一首とこの三體詩に載る唐末温州の刺史朱褒の詩から、やはり漱石の青春の懊悩が垣間見られる。

どのくらい穿鑿して良いかわからないが、この当時の夏目金之助には確かに恋愛問題があって、古くからそのことに多くの漱石研究者たちが様々な説を述べている。漱石の初恋の人に上がる女性として、一、漱石の兄嫁、登世（江藤淳氏説）、二、友人小屋保治の妻、大塚楠緒子（小坂晋氏説）、三、黒目がちの柳橋芸者（宮井一郎氏の説）、四、井上眼科で会った少女、説（荻原雄一氏は陸奥宗光と亮子の娘「陸奥清子」がその女性だとし、いくつかの著書がある。）など興味深い内容であるが、この年に残存する漱石書簡を順を追って読んでいくと、正岡子規宛ての内容がいちばん夏目金之助の心情を正直に吐露しているように思える。

九月四日　帝国大学寄宿舎で綴られる書簡をまとめると、「のそのそ」と旅行から帰ってきた自分の漂泊は、「此三四年来沸騰せる脳漿を冷却して尺寸の勉強心を振興せん為」であり、「心の穏やかならざる」を何とかしたいと色々やったがうまくいかず、「此頸頭の鉄鎖を断ずるの斧なきを如何にせん」と愚痴をこぼすが勇気をもって前進できない。その自分を駆り立て松島の瑞巌寺に詣でて禅僧南天棒の指導を受けようと行くがそれも挫け、台風の中荒れ狂う逗子の海岸に飛び込み宿の主人の忠告も聞かず、逆巻く怒涛の中で喚き散らす瞬時の快感を得るばかり。大学院に在籍しながら勉強もせず読書も手に着かぬ「不平」なる「コンヂション」であったが、ただ一つ「不平」な状態にあって、シェリーの詩集を繰り返し熟読することが愉快であり、「不平」

が頂点に達した時、このシェリーの詩の言葉によって自分はある根本原理を感得したとも言っている。

ある時は悩み悶え、ある時はシェリーの詩によって心澄ますという、こころの振幅の大きな揺れの中に金之助はあったが、九月の中旬頃、先述のように彼は帝国大学寄宿舎を出て実家には帰らず菅の新居に転がり込む。この時菅は結婚二年目、一歳になる男の子がいて、日本中学校の教員であり東京美術学校教育学教授の嘱託も受けていた。ところが程なくして、金之助は漢詩を書き置きして突然出て行ってしまうという不可解な行動を起す。この同居の時、そこで菅虎雄を「驚かすやうなこと」があったともいわれるが、これらのことと漢詩の書き置きについては菅虎雄も他の友人たちもそれがどういう内容であったか全く言おうとしない。菅の『夏目君の書簡』という文章の中でも、彼は「夏目君の書簡といって今私はあまりたくさん所持してゐない、之は極く親しかつたため、生前その書簡もそんなに大切にせず保存もしておかなかつた為である。・・・・」と書いているが、このあと、菅は以前自分が下宿したことのある「伝通院」を金之助に斡旋して一段落させる。

十月十六日の日付で幾人かの友人に転居の通知を出している。いまは次の三通が残る。

・正岡子規宛

塵界茫茫、毀誉の耳朶を撲に堪ず。此に環堵の室を賃して蠕袋を葬り了んぬ。猶尼僧の隣房に語るあり。少々興覚申候。御閑の節、是非御来遊を乞ふ。

・狩野亨吉宛

所々流浪の末、遂に此所に蟄居致候。御閑暇の節は御来遊可被下候。

・小屋保治宛

遊子漂蕩の末、遂に蠕袋を此所に葬り了り申候。御閑暇の節は御来会可被下候。

正岡子規には十月三十一日の日付でもう一通出しており、伝通院への道順の案内と手書きの地図まで書いてある。さらに隣房の尼僧の気に障ることが書かれ、「尼寺に有髪の僧を尋ね来よ」という句が添えられている。この尼僧たちについては、『夏目漱石外伝　菅虎雄先生生誕百五十年記念文集』（菅虎雄先生顕彰会　代表原武　哲）に載る荻原雄一氏の『漱石の初恋と菅虎雄』に非常に詳しい調査と考証が載り、大変興味深い。

そしてその後十二月の暮れ、金之助は菅虎雄に勧められて、円覚寺参禅に出かけるのである。漱石は禅について無知であったとはいえない。先の正岡子規宛ての手紙の中にも、見性とか禅機とか南天棒とか、更に禅籍である『従容録』の四十一則と七十九則に引かれる「不入驚人浪。難逢稱意魚。」という句まで知っている。金之助の周りには菅虎雄のほかにも米山保三郎や松本文三郎などかなり多く参禅経験のある学友がいて、禅に関する知識は仲間とともにすでにかなり共有していたものと思われる。例えば、八月に東北松島の瑞巌寺へ行き南天棒に直接会って教えを請おうとしたことなどはその一つの表れで、今の自分の精神状況を打破してくれるものを切に望んでいた。正岡子規への手紙には自己の懊悩の告白にシェリーの詩を繰り返し繰り返し熟読して確かな哲理を掴もうとしていたことも読み取れる。このシェリーの詩はやがて明治三十九年に小説『草枕』の中で取り上げられ「シェレーの雲雀の詩」として発表される。

We look before and after　　And pine for what is not:
Our sincerest laughter　　With some pain is fraught;
Our sweetest songs are those that tell of saddest thought.

「前をみては、後えを見ては、物欲しと、あこがるるかな われ。
腹からの、笑といえど、苦しみの、そこにあるべし。
うつくしき、極みの歌に、悲しさの、極みの想、籠るとぞ知れ」

明治二十七年の臘月、菅虎雄とどのような話し合いをしてそして菅のどのような説得によって夏目金之助が円覚寺参禅に同意したかわからないが、円覚寺の門をくぐって行くことになる。この年六月には多くの家屋が倒壊する程ほどの大地震がおこり、八月には日清戦争が勃発する。これらも金之助の情緒を不安定にさせるなんらかの要因ではなかったろうか。六月の伊香保への旅行、八月の松島への旅行、九月の湘南への旅行。そして菅宅に転がり込で、家人を驚かせるようなことを起こし、挙句には飛び出していく夏目金之助にいったい具体的に何があったのだろうか。あの大野少年が「漱石が伝通院から急に松山に行っ

てしまったのはどんな事情があったんですか」と質問したのは、まさにこの時期の事であり、老先生である菅虎雄はとぼけたようにして答えないで横を向いてしまう。しかし彼は金之助の精神状態をしっかり見届ている友人であり、どのようにすれば友を暗黒から救い出すことができるか思慮を重ねていた。菅は金之助の暗部を握っている人物であったが、当時の金之助にまつわることを、決して口外しなかった。自分宛ての漱石の書簡ですら処分してしまったというから、徹底している。

精神的に方向を見失ってしまった、どん底の金之助に寄り添うようにして援助し続けたのが菅虎雄であるが、禅の為人に期待して、困窮の底に居る金之助に紹介状を持たせ円覚寺での参禅に導くのである。

菅虎雄自身の禅の経歴は、初め参禅したのは明治二十一年帝国大学文科大学独逸文学科一年生二十三歳の時、北鎌倉の円覚寺で今北洪川に師事し、洪川老師の亡くなるまで参禅は続く。（ただし洪川老師の遷化は明治二十五年一月十六日。）菅は参禅二年目にして居士号を洪川老師から賜り「無為」と安名された。それは彼の修行が行業純一で、その結果一見識を得たことが証明されたと考えられる。

この洪川老師亡き後を嗣ぐのが三十二歳の釈宗演であり、若くして円覚寺の管長となり同時に雲水を教化する師家となるが、菅虎雄とは兄弟弟子でもある。金之助は菅の紹介状を頼りにこの新進気鋭の老師に相見することになる。十二月二十三日から翌年の一月七日までの十日間の参禅である。この参禅期間中の修行がどのようなものであったか、また参究した公案がどのように宗演老師によって決められたかわからないが、円覚寺の参禅を終え下山して間もないころ書いた友人への手紙によると、

新年の御慶目出度申納候　今度は篠原嬢とご結婚のよし　謹んで御祝ひ申上候。小子去冬より鎌倉の楞伽窟に参禅の為め、帰源院と申す処に止宿致し、旬日の間折脚鐺裏の粥に飯袋を養ひ、漸く一昨日下山の上、帰京仕候。　五百生の野狐禅、遂に本来の面目を撥出し来らず。　御憫笑可被下候。　先は右御祝ひまで。　余は拝眉の上万々。

本郷駒込千駄木町五十七番地　斎藤阿具様　一月九日

小石川表町七十三番地法蔵院　夏目金之助

とあって、「本来の面目を撥出し来らず」という言葉に金之助の体験が凝縮されていたということが読み取れる。また、ずっとのちのことであるが、漱石は明治四十年十一月に、高浜虚子著『鶏頭』の序に

余は禅というものを知らない。昔鎌倉の宗演和尚に参して父母未生以前本来の面目はなんだと聞かれてがんと参ったぎりまだ本来の面目に御目に懸った事のない門外漢である。だからここに禅味抔という問題を出すのは自分が禅を心得て居るから云うのではない。智識のかいたものに悟とはこんなものであるとあるから果してそんなものなら、こう云う人生観が出来るだろう。こう云う人生観が出来るならば小説もこんな態度にかけるだろうと論ずるまでである。（以下略）

と述べていることから「父母未生以前本来の面目」が宗演老師から授けられた公案として授けられたことがわかる。

ところが、明治四十三年四月に発表された『談話』「色気を去れよ」漱石全集第二十五巻には、

「夏目さん開静ですよ」

不図眼を覚ますと宗活さんに揺り起こされてゐた、時計を見るとまだ午前二時の未明、ゴオーンと大鐘が鳴る、禅堂では引磬の八釜しい音がする、木板がバンバン響く、半鐘が鳴る、ワイワイ読経の声がする、次いで鳴り響く喚鐘の相図に私等は隠寮に行つた、ぜひとも居士禅子雲水などがウヨウヨゐる、夫れが代る代る喚鐘を敲いては宗演老師の前に行つて見解を呈し、後ち老師の垂戒がすむと鈴が鳴る、次から次へと入室して愈々私の順番となった、同じ様に喚鐘を敲いて老師の前に出ると宗演さんは莞爾笑つて簡単な禅の心得を語り、終つて慥か趙州の無字を公案として授かつた、居室に帰り一向専念、無？無？無？無？無？

其中暮方になり禅堂へ行くとずらりと禅坊主が座つてゐる。見渡した所何れもこれも女の惚れさうなのは一人もない、私も其仲間に入つて座わると、何となく変な気持がして吹き出したくなるから大に閉口した、斯て再び参禅が始まる、私の順番になつて未明に授かつた公案について見解を述べる、言下に退けられて了ふ、今度は哲学式の理窟をいふと尚更駄目だと取合はぬ、禅坊主程駄々ツ子はあるまいとほとほと感じた、（以下略）

とあって、ここでは宗演老師から授けられた公案が趙州の「無字」となっている。

さらに、明治四十一年七月二十五日から八月五日まで朝日新聞に掲載された『夢十夜』の第二夜の話は「無字」の公案を必死に取り組む姿を描いたもので、

短刀を鞘へ収めて右脇へ引きつけておいて、それから全伽を組んだ。――趙州曰く無と。無とは何だ。糞坊主めとはがみをした。

奥歯を強く咬み締めたので、鼻から熱い息が荒く出る。こめかみが釣って痛い。眼は普通の倍も大きく開けてやった。懸物が見える。行灯が見える。畳が見える。和尚の薬缶頭がありありと見える。鰐口を開いて嘲笑った声まで聞える。怪しからん坊主だ。どうしてもあの薬缶を首にしなくてはならん。悟ってやる。無だ、無だと舌の根で念じた。無だと云うのにやっぱり線香の香がした。何だ線香のくせに。

自分はいきなり拳骨を固めて自分の頭をいやと云うほど擲った。そうして奥歯をぎりぎりと噛んだ。両腋から汗が出る。背中が棒のようになった。膝の接目が急に痛くなった。膝が折れたってどうあるものかと思った。けれども痛い。苦しい。無はなかなか出て来ない。出て来ると思うとすぐ痛くなる。腹が立つ。無念になる。非常に口惜しくなる。涙がほろほろ出る。ひと思に身を巨巌の上にぶつけて、骨も肉もめちゃめちゃに砕いてしまいたくなる。

無字の公案と格闘する参究のすさまじさを描写するが、この作品の中には老師も登場せず、場所も特定されていない、夢の世界での出来事であると言ってしまえばそれまでだが、いかに創作の世界だといっても、やはり作者の体験がなければ我々を感動させる描写はできない。果たして漱石に無字の公案の体験があったのだろうか。

『門』は明治四十三年三月から六月まで朝日新聞に連載された作品で、先に挙げた『談話』「色気を去れよ」とほぼ同じころのものである。十五年前の円覚寺の参禅体験が作品の後半部にかなり詳しく描かれている。

老師といふのは五十格好に見えた。赭黒い光澤のある顔してゐた。其の皮膚も筋肉も悉とく緊つて、何所にも怠のない所が、

銅像のもたらす印象を、宗助の胸に彫り付けた。たゞ唇があまり厚過るので、其所に幾分の弛みが見えた。其代り彼の眼には、普通の人間に到底見るべからざる一種の精彩が閃めいた。宗助が始めて其視線に接した時は、暗中に卒然として白刃を見る思があつた。

「まあ何から入つても同じであるが」と老師は宗助に向つて云つた。「父母未生以前本來の面目は何だか、それを一つ考へて見たら善かろう」

宗助には父母未生以前といふ意味がよく分らなかつたが、何しろ自分と云ふものは必竟何物だか、其本體を捕まへて見ろと云ふ意味だらうと判斷した。それより以上口を利くには、餘り禪といふもの丶知識に乏しかつたので、默つて又宜道に伴れられて一窓庵へ歸つて來た。

小説『門』の後半部は一つの参禅記として読むこともできる。われわれは、この『門』という作品で「禅の修行」とはこういうものかと知るようになる。釈宗演老師の表情・親切な宜道という僧の人柄、そして何よりも「もつと、ぎろりとした所を持つて来なければ駄目だ」という老師のずしりと来る言葉が作品のことばとして忘れられない。夏目漱石と禅が太く結びつくのはこの作品で、「父母未生以前と云ふ稀有な問題」を凝と眺める主人公宗助に自分を投影する読者は多かったはずである。

一体当時の円覚寺の参禅ではどのような公案が使われていたのか調べてみると興味深いことがみえてくる。夏目金之助と同時期の人々にはどういう人が参集したか。入門者名簿「楞伽窟会上居士禅子名簿」を閲覧すると、

夏目金之助の右隣りには熊本縣阿蘇郡草ケ部村千九百六十一番地　甲斐方策（明治二十七年に『日本仏教之新紀元』を出版）、その右には、後にライオン宰相と呼ばれた濱口雄幸（当時二十五歳）の名が見える。逆に左隣は若き日の井上円了の紹介による（東京赤坂区榎坂町）元良勇次郎。彼はこの時、三十六歳、帝国大学文科大学教授でかつ高等師範学校で心理学を講じる教授であったが、禅の心理学的研究のため円覚寺に参禅を申し出た。公案は「隻手音声」であった。この参禅体験をまとめたのが『参禅日誌』として発表されている。この参禅以前に米国の大学でプラグマティズムのジョン・デューイやウイリアム・ジェイムズなどの影響を受け、のちに日本に著書を紹介している。漱石は修善寺の大患の後の養生中にウイリアム・ジェイムズの著書『多元的宇宙』を読破している。またしばらくしてジェイムスの死を雑誌で知る。　元良勇次郎については　『駒澤大学仏教学部論

集第四九号』に載る石井公成氏の「近代におけるZenの登場と心の探求(1)」が参考になる。

当時の円覚寺では参禅者への初関は幾つかあったものなのか。夏目金之助と同じ日に参禅に訪れた元良勇次郎は白隠禅師の「隻手音声」を授かり、夏目金之助は「父母未生以前本来の面目」を参究する。これは師家の修行者を見抜く力によるものか、参禅者の性格に合わせて老師が適宜授けていったのか。十日間の短い参禅で複数の公案を授けられるのはやはりおかしい。

『禅海一瀾講話』は今北洪川の著作を釈宗演が詳しく解説したもので、第四十五講　致知　第十八則によると、

> 禅宗の如きは「根本の真智」というものを最初に知らせて、それから実際問題に入るので、その「真智」を説かんが為に、六祖大師は「父母未生已前、本来の面目」と言い、白隠禅師は「隻手に何の声ある」と言うも、「根本の真智」を実際的に徹底させ様という手段に過ぎない。或いは趙州は「無」の一字を唱え出したのも、根本の真智を親しく味わわせ様というのである。或いは「庭前の柏樹子」ととなえたのも矢張り根本の真智を手に入れさせ様というのである。

と言って、修行者の性格に合わせて与えたようだ。このことは『図書』二〇一九二月号の小川隆氏の「漱石の公案――釈宗演『禅海一瀾講話』と父母未生以前本来の面目」に詳しく解説されている。

それではなぜ、漱石は「無字」の公案を経験したように書けたのか。いったい「無字の公案」をどこで夏目金之助は体験したのだろうか。

菅虎雄研究の第一人者である原武　哲氏の調査によると、東京から松山に都落ちした金之助は一年後さらに九州の熊本に移り、五高（後の熊本大学）に赴任している。これも菅虎雄の後ろ盾があって成立していることなのだが、そこで菅によって当地の五高の英語嘱託講師浅井永熙が紹介される。この人は若い頃、胸を患い生死の境を彷徨っているときに熊本雲祥山見性寺の住職宗般玄芳と邂逅し、白隠の『夜船閑話』を与えられ、これを自習することにより身体を恢復させたという。さらに禅修行に打ち込み「自哲」という居士号を安名されるまで禅に参究した経験を持つ。菅虎雄の友人浅井永熙は金之助の心身養成に大きな影響を与えたものと思われる。金之助もこの仲間とともにあれば見性寺で参禅した可能性が大いにありうるし、公案を授けられ入室して和尚の鉄槌を受けたことも想像される。ということは、趙州の「無字」の公案はこの地で体験された可能性

がある。

夏目金之助のはじめての正式な参禅は鎌倉円覚寺の釈宗演のもとで行われた。すべて友人の菅虎雄のはからいによるもので、金之助自ら積極に道を求めての己事究明ではなかった。「此三四年来沸騰せる脳漿を冷却」させるもの、「此頸頭の鉄鎖を断ずる斧」、これが欲しかったのである。十日間の参禅で参究した「本来の面目」という公案も通過できなかったし、「斧」も手に入らなかった。後年の漱石の禅の理解をたずねるにはどうしても熊本時代の参禅を調べなければならないであろう。

〈キーワード〉菅虎雄、円覚寺、見性寺、参禅、公案

	漱石	菅	宗活	鈴・西	宗演	月	夏目漱石の出来事	菅虎雄・鈴木大拙・西田幾多郎
明治24　1891	24	28	20	21	31	6		菅虎雄、帝国大学文化大学独逸文学科卒業。
						7	特待生となる。眼医者で美しい娘に逢う　兄嫁登世没（二四）　菅虎雄と会う	鈴木、美川小学校退職、上京、本郷駒込に下宿。専門学校で、坪内逍遥に英語を学ぶ。
						8	友人らと富士登山（二回め）	
						9		西田、東京帝国大学分科大学哲学科選科に入学
						10	相模　大山	
						11		鈴木・西田、鎌倉円覚寺今北洪川に参禅
						12	J．M．ディクソン教授に頼まれて「方丈記」を英訳	
明治25　1892	25	29	21	22	32	1		今北洪川遷化
						2		
						3		釈宗演、円覚寺管長、正続院僧堂師家
						4	徴兵を避ける為、分家届、北海道平民	鈴木、釈宗演に参禅
						5	東京専門学校の講師となる。	鈴木、東京帝国大学分科大学哲学科選科に入学
						6	「老子の哲学」脱稿	
						7	夏、子規と京都、堺、岡山、松山を旅行する。岡山では大洪水を経験を経験。高浜清（虚子）を知る。	
						8		菅虎雄、南静代と結婚
						9		菅虎雄、日本中学校教員
						10		
						11		
						12	「中学改良策」を執筆	

明治26　1893		
26		
30		
22		
23		
33		
1	帝国大学文科大学英文学談話会で、「英国詩人の天地山川に対する観念」を講演	
2		菅虎雄、東京美術学校教育学教授嘱託
3	講演の原稿が「哲学雑誌」に載る	
4		
5		
6	講師ケーベルの影響を受ける	
7	英文科を卒業、立花政樹（二四年卒）に次いで二人目の卒業生。帝国大学大学院に進学する。指導教官は、ウッド	
8	学習院大学英語教師の就職話があったが重見周吉に決まり不調に終る	釈宗演、万国宗教会議参加のため渡米
9	八月小屋保治興津清見寺で大塚楠緒子に会う	釈宗演、講演「仏教の要旨並に因果法」「戦ふに代ふるに和を以てす」
10	東京高等師範学校の英語嘱託となる．年俸四五〇円（月額三十七円五〇銭）	
11		釈宗演、『万国宗教大会一覧』刊行
12		

明治27　1894		
27		
31		
23		
24		
34		
1	※この年から翌年にかけて、神経衰弱の病状著しい	
2	血痰のため菅虎雄と北里柴三郎のところに行く。結核ではなかった。	鈴木、この年に居士号「大拙」
3		
4		
5	結核と思われた症状が消える。	
6	大地震	
7	上野から伊香保に行く。小屋保治を誘おうとする	西田、東京帝国大学分科大学哲学科選科を卒業
8	松島に行く。瑞巌寺に詣で南天棒の下で坐禅しようとしたが止める。日清戦争始まる	釈宗演、「五百羅漢図」売却の認可が下りず管長職の辞表を提出
9	逗子へ海水浴　正岡子規に手紙で心の悩みを訴える	釈宗演、『坐禅論和解』出版
10	菅虎雄宅に寄宿　突然漢詩を書置きし飛出す　菅の世話で伝通院脇の法蔵院に下宿	
11	この頃頻繁に狩野亨吉を訪う	
12	菅虎雄の紹介で鎌倉円覚寺の帰源院に入り、二十三日夜（あるいは翌朝）から翌	浜口雄幸・元良勇次郎らが参禅

明治28　1895			
28			
32			
24			
25			
35			
1	正月七日まで参禅。一月中旬ごろ「ジャパン・メール」の記者を志望、禅についての英語論文を書くが不採用		
2			
3	正岡子規病身で従軍記者　漱石、小屋の結婚式に出席	小屋保治、大塚楠緒子と結婚	
4	法蔵院を出る　愛媛県尋常中学校（松山中学校）に英語科教師として赴任	西田、石川県能登尋常中学校七尾分校教諭	
5	道後温泉へ出かける　正岡帰国喀血・危篤	西田、得田寿美と結婚	
6	転居先を愚陀仏庵と名付け正岡子規と同宿	鈴木、五月に東京帝国大学分科大学を中退	
7		菅虎雄、熊本赴任決定。熊本に向かう。第五高等学校嘱託	
8	子規、松山の漱石の下宿に住む。俳句に熱中		
9			
10			
11			
12	上京し中根鏡と縁談見合い。婚約成立	釈宗演、福沢諭吉の還暦祝いに漢詩	